

都幾山慈光寺所蔵 木造伝毘沙門天立像の再修復処置について

関根 理恵*・辻 賢三**
石栗 太***・相蘇 春菜****

要 約

埼玉県比企郡都幾川町にある都幾山慈光寺所蔵の木造伝毘沙門天像の保存に際し、再修復処置を施す機会を得た。この論文は、再修復処置に関する報告と、修復処置および研究によって得た文化財情報に関する報告である。本再修復処置では、過大な修復を行わないことで、オーセンティシティーを尊重した修復処置を施すことができた。

また、修復時に素材同定用の試料を採取することができたことから、理化学的手法として顕微鏡を用いた組織解析を行い、従来、目視のみで素材を判別していたため、推測の域を出ないまま不明確であった基材部の素材について、素材同定することができ、ケヤキ (*Zelkova serrata*) であることを明らかにすることができた。

キーワード：保存修復、仏像、平安時代、都幾山慈光寺

1. 都幾山慈光寺の位置

都幾山慈光寺は、東経 139° 4' 00", 北緯 36° 0' 30", 埼玉県比企郡の西方、都幾川町内にあり、都幾川町の中央部、北側に位置する都幾山内に位置している。標高は、400m前後である。町内には、縄文時代の遺跡が点在し、約1万年前後の有史ある地域である。1973年度から実施された埼玉県重要遺跡調査により、慈光寺遺跡群の存在が明らかになった⁽¹⁾。1993年の現況調査では、元禄十年『一山絵図』を基にした現況等の比較調査が行われ、詳細に山内広域にわたって調査がなされた。その際、現在残っている都幾山慈光寺本坊を中心に、126を超える僧坊跡が確認された⁽²⁾。その中には、山内浄土院の傍に今回、再修復処置が施された毘沙門天立像が安置されていたと思われる毘沙門堂（所在地：都幾山2689）の跡が、存在していたことが明らかにされている。

2. 都幾山慈光寺の歴史的背景

都幾山慈光寺は、埼玉県の中でも最も古い歴史を有する天台の流れを汲む寺院である。その歴史は、寺に伝えられている「都幾山慈光寺実録」に詳しく記述されており、都幾山慈光寺の縁起にまつわる話が3つ傳承されている。一つは、天武2年(673年)に奈良興福寺の僧侶、釈慈訓が、観音堂を建立したとされる縁起がある。二つ目は、天武9年(680年)に役小角が西藏坊を建立したという縁起があり、三つ目は、慈光寺の中心となる仏堂を釈道忠上人(735-800)が仏堂を建立し、釈迦如来像を安置したことが始まりであるという縁起である⁽³⁾。三つの縁起とも、時期がさだかではないことが研究者から指摘されているが⁽⁴⁾、都幾山慈光寺とゆかりの深い釈道忠上人が鑑真(688-763)の弟子であることから、鑑真が日本に渡来した後の出来事として類推すれば、753年12月以後に創建されたと考えるのが妥当であろう。その後、貞観年間(859-877)に、聖和天皇の勅願により慈光寺は、天台別院一乘法華院と称することとなり、三宗(台・密・禪)の三宗を兼学するほどの格の高い寺院として発展した⁽⁵⁾。そ

2014年11月30日受付

* 江戸川大学 現代社会学科専任講師 文化財学

** 東京藝術大学大学院美術研究科教授 保存修復

*** 宇都宮大学准教授 木材材料学

**** 東京農工大学大学院連合農学研究科博士課程

の後、源頼朝が奥州、藤原泰衡討伐のため、愛染明王像を戦勝祈願のため寄進するとともに、祈願成就により一山75カ寺を修復し、田畑1200町を寄進するなど、源頼朝および鎌倉幕府の庇護を受け、栄華を極めた。

3. 平安期の東国文化

都幾山慈光寺は東国文化圏に位置するが、東国というのは、愛知から始まり、岐阜、福井などの中部地方、および関東一円、そして青森、秋田、岩手といった東北地方までの広範囲に及ぶ地域を雑駁に意味する。この地域における注目すべき動きとしては、平安時代の初め、延暦21年(802年)に坂上田村麻呂が鎮守府を多賀城から岩手県水沢市佐倉河の胆沢城へ移したことである。この蝦夷に対する基地局の設置は、内国化・律令化とともに政治と文化の開花を意味した⁽⁶⁾。この北方地域の発展とともに、周辺に寺社が創建された。

蝦夷との戦禍により大同2年(807年)、薬師寺が焼失するなどの事件があったものの、嘉祥2年(849年)、天台宗三世慈覚大師円仁により四十八字が造立された史実や、妙見山黒石寺の薬師如来像に貞観4年(862年)の墨書銘が残っていることなどから、9世紀中頃には大きな寺社の造立とともに仏教文化が東国にて十分に発展していたことがわかる⁽⁷⁾。

同時に、東国の国家発展に伴い、宗教者も新地への進出を図った。有能な僧侶とともに、全盛期の唐の影響を受けた張りのあるゆったりとした嫺やかな仏像様式がもたらされ、それまでの鑄造や乾漆、塑像から、木彫が主流となっていた南都での最新の流れが東国へと伝播した⁽⁸⁾。戦乱や災害続きの東国の地において、新興の天台宗や真言宗が救済を目的に熱心に布教活動に取り組んだこと⁽⁹⁾や、奈良法相宗興福寺で学んだ奈良仏教の学僧・徳一上人の活動などの史実⁽¹⁰⁾を鑑みれば、平安期の東国の文化は、仏教によって飛躍的に発展していったといえよう。

4. 毘沙門天信仰について

毘沙門天とは、天部の仏を指し、バラモン教やその他の宗教の影響を受け、仏教に取り入れられた諸神である。仏典の中では、釈迦の説法により教化され仏法を擁護することを誓った神々とされている⁽¹¹⁾。天部諸神を仏教の神として解釈し、単独の信仰が行われるようになったのは密教的信仰の成立以降と言われ、密教的信仰と共に発展した⁽¹²⁾。四天王像は、『陀羅尼集経』に像形が示されており、聖徳太子が四天王像を信仰したと言われるため仏教伝来の頃より日本にあった思想と考えられ、奈良時代を通じて、金光明経信仰によって広まった。四天王像は、仏教以前からインド人の中で信仰されていた神である。須弥山の頂上に住む帝釈天の眷属で、四方の門を守護している神として仏教を守護すると誓った四天王は、釈迦像の周りを方位ごとに守護する天部像として現されるようになった。

四天王はそれぞれ、持国天(東)、増長天(南)、広目天(西)、多聞天(北)とし、経典に護法神として取り上げられている。

単独で信仰されるようになったのは、奈良時代後期と見られ、西大寺資材帳に記述が見える多聞天が最初と言われる⁽¹³⁾。多聞天は、毘沙門天として有名であるが、平安時代には独自の信仰の下、重要視されていた。その一つに、東寺食堂の兜跋毘沙門天像がある。これは、唐から持ち帰った貴重な像であると考えられている。もともと、平安京の正門にあった羅城門に安置されていたその像の姿は、中国的というよりは西域風であり、安西都護符における不空三蔵の祈祷により毘沙門天が出現し、王城の門を守護した伝説を物語るかのような容姿であり、日本で制作されたものではないことがわかる。

一方で、鞍馬寺の毘沙門天像や、東北地方の数か所の寺に現存している兜跋毘沙門天像は異形であり、着衣の表現や技法などから、日本で作られたと考えられる。

なぜ、東北地方で毘沙門天像が信仰されたかと

いえば、先述した坂上田村麻呂の蝦夷討伐との関係があるとみられ、北方鎮護の意味合いから信仰されたと見られる⁽¹⁴⁾。特に、天台寺、藤里毘沙門堂、立花毘沙門堂の毘沙門天像は、大きな狂いもなく、均整のとれたプロポーシオンであることから、その優美さが高く評価されている。

さらに、この時期の毘沙門天信仰の一つに、天台宗における毘沙門天信仰も関わっていたと考えられ、都幾山慈光寺は天台宗寺院であることから、その点についてここで指摘したい。

比叡山を中心とする天台寺院では、観音を中尊とし、脇侍に不動明王および毘沙門天像を侍らせることが多く、その理由は、天台宗の高僧・円仁の毘沙門天信仰が無関係ではないと考えられる⁽¹⁵⁾。

その理由は、円仁が唐から帰国する際に、海上で嵐に遭遇し、観音菩薩に救済を求めたところ、毘沙門天が現れ、暴風雨がたちまちおさまったという。これを受け、円仁は、横川中堂に観音・毘沙門天の仁蔵を安置したといい、その後、慈恵大師造立の不動明王を加えて三尊とし、以後、熱心にこの三尊を信仰したからである。

このことから、都幾山慈光寺は天台宗の古刹であり、東国第一の修行道場として目され、比叡山に並び重要な地位を占めていた。このことを踏まえれば、創建からほど遠くない早い時期から、この毘沙門天像が制作され、篤く信仰されていたと考えても不思議はない。

先行研究の中には、当該文化財を「毘沙門天立像」ではなく、「仁王像」である可能性があるとして指摘する研究者もあるが、都幾山慈光寺には平安時代に制作されたと見られる仁王像は、当該文化財以外に二軀（阿形・吽形）揃って伝来しており、山内に三軀も大きな仁王像がある必要がないことや、毘沙門堂の存在が、伝来する古文書や古地図などで確認することができることから、当該文化財は、「毘沙門天立像」であるのが妥当といえよう。また、毘沙門天が都幾山慈光寺内でも信仰されていたことを裏付ける貴重な文化財であり、そこに、当該文化財の価値があると考えられる。

5. 平安仏の特徴

木彫の仏像は、飛鳥時代にあったが、奈良時代になると、銅像や塑像、乾漆像が多く作られ、木彫は積極的に作られなかった。しかし、唐招提寺の木彫像を代表として、8世紀後半（奈良時代後期）になり、木彫像の制作がまた盛んとなり、それ以後、日本では木彫の仏像が定着した⁽¹⁶⁾。その理由には、大陸の影響なども考えられる⁽¹⁷⁾が、一方で、延暦年中における造法華寺司の廃止の影響もあったことも指摘されている⁽¹⁸⁾。両造寺司の廃止は、実質官営の造仏所の解体であったようで、多人数での仏像制作が困難となり、脱乾漆像の制作は困難になった。そのため、木彫が主流を占めるようになった。また、『靈異記』の僧観規や寛平2（890）年に崇福寺の僧神恵が檀像四天王を制作した例、平安初期の会理僧都の例などに見られるように、天平後期頃までには、僧侶による仏像制作が行われ始めた⁽¹⁹⁾。その他、造仏の功德により僧位が与えられるようになり、益々、僧侶による仏像制作が盛んになったと考えられる。このような背景から、官営の仏像所が解体したことで、単一的な仏像制作から、様々な様式を含む多様な仏像制作にシフトしていったことが理解できる⁽²⁰⁾。

東国における9世紀頃の仏像では、神奈川県の箱根神社の万巻や、福島県瑠璃光山常勝寺などの仏像群⁽²¹⁾、岩手県妙見山黒石寺の薬師如来坐像⁽²²⁾、岩手県成島毘沙門天堂の兜跋毘沙門天像などが知られる⁽²³⁾。これらに様式など特徴的な強い共通性は見受けられない。しかし、基材にヒノキを使用していない点が共通点として指摘されている⁽²⁴⁾。当時、国家の主軸である西日本（中央）の像では、ヒノキが用いられていることが多いのに対し、東国の古い時代の彫刻では、他の木材が基材として用いられていたことがわかっている⁽²⁵⁾。針葉樹ではカヤが用いられる他、カツラ、ケヤキ、サクラ、クワ、ハンノキ、アサダ、ハルニレ、ハリギリ、カバ、トチ、シオジなど広葉樹が用いられている⁽²⁶⁾。この点については、ヒノキの自生

する範囲の北限が福島県の海岸地方であることや、唐招提寺講堂の像などに用いられている材がチャンチン（香椿：*Toonasinensis*）であり、広葉樹であった点などから、これによく似た日本産の材を探し、ハルニレやケヤキを使ったのではないかとの考え方もある⁽²⁷⁾。また、東国を、東北と関東（茨城・栃木・埼玉・群馬・千葉・東京・神奈川）に便宜上わけて考えてみると、関東では、広葉樹の割合が東北に比べて少なく、針葉樹の割合が七割五分程度占め、広葉樹が二割五分程度である。針葉樹の主材はカヤであり、関東地方では、発掘される古代の舟やろの材料に、カヤが比較的多く用いられていたことが分かっている⁽²⁸⁾。古事記と日本書紀には、27科40属に及ぶ様々な樹種に関する記述があり、素戔鳴尊（すさのおのみこと）が、ヒノキ、クスノキ、スギ、マキなどの用途を教える場面もあるなど、木材に対して知識をもっており、物造りの場面で用材選択に深慮し適材適所を心がけていたことがうかがえる。

これは、近畿地方の古墳では、棺材にほとんどコウヤマキを用いていた例や先述の関東地方におけるカヤの利用例などから、良材というのを当時の人々が意識して好んで使っていたことを物語っている⁽²⁹⁾。この事実を考えると、カヤではなく、ケヤキが用いられている点に本文化財の特徴がある。多くの仏像でカヤが使われている事例が指摘されているが⁽³⁰⁾、一方で、カヤ以外の彫刻がしづらく扱にくい素材であるケヤキが用いられている点は特異であり、この時代に多く採用されていることから、意図的に選択し用いられていたと考えることが妥当であろう。よって、その一因を考えれば、多くの研究者が指摘する中国からの影響によるものだという理由⁽³¹⁾も、理解することができる⁽³²⁾。

しかし一方で、当時、最新の様式・技法である唐招提寺などの晩唐様式が、逐一、東北に及んだとする説は、具体的に様式の上で証明することは難しいとの指摘もあるが⁽³³⁾、人物の交流を考えれば、その時代の最新様式がスピーディに東北の仏像に取り入れられることも不自然ではない。そして、鎌倉時代以降になると関東でも基材がヒノ

キに限られてくる傾向も見られるため⁽³⁴⁾、やはり意識的に選択し、利用していたと考えることが妥当であろう。

6. 都幾山慈光寺所蔵 伝木造毘沙門天立像について

構造は、一木造で内割りはない。高さ約187cm、幅47.8cm（現状）から推測するに、造立当時は2mを超える、もしくは2m近い大型立像であったと思われる。

内割を施さない構造で彫眼。着色がなく、素地仕上げ。頭部、幹部から足下まで縦一材に彫刻を施す。正面を向き頭に髻を結び、瞋目、力強い鼻柱、張り気味のエラを持つ。重量感のある体軀は、右にひねり、脚を開いてバランスを保っている。両腕部は亡失しているが、構造特性および痕跡から判断すると、両腕を肩から矧ぎつけていたと思われる。

損朽が激しく姿は明確ではなく、表甲を着用しているのか未着用なのか判然としないが、すっきりとした胸廻りと腰下の着衣が認められる。台座には、立像とは異なる後世の修復の際に取り付けられたとみられる別材が用いられている。邪鬼などの残存部も見当たらないことから、足首より下は、どのようなものであったかわからない。

ここで注目したい点は、本文化財が、福島県福島市にある宝城山大蔵寺の天部形立像に酷似している点である。

宝城山大蔵寺には平安前期とみられる28軀の仏像が現存しており、それらがすべて一木彫であることに特徴があるが、一木彫である点のみならず下半身および着衣の表現、胸から胴にかけての表現、脚の様子、像の中心に木心がある一木彫である点、両腕を矧ぐ点、頭部や胸部などの量感など、共通性が少なからず見受けられる。

さらに、これらの像の材質がケヤキとカヤが大半を占めていることが指摘されており⁽³⁵⁾、都幾山慈光寺の伝木造毘沙門天立像もケヤキでつくられていることから、基材の共通性がみられる点がとても興味深い。また、節がある材を用いておお

らかに作られていることから、霊木を使って制作されたことが指摘されており⁽³⁶⁾、神仏習合文化圏にみられる自然に神仏がやどっている思想である「霊木化現仏」の影響⁽³⁷⁾が見受けられることなど、醸成される宗教観を含む歴史的背景を踏まえれば、これら宝城山大蔵寺の像が制作された時期⁽³⁸⁾と近い時期に、都幾山慈光寺の伝木造毘沙門天立像が制作されたと考えるのが妥当ではないだろうか。

また、東北の巨利、極楽寺の立花毘沙門堂の毘沙門天立像（10世紀頃）の胸部や脚などの表現に比べ、素朴で緩やかな表現であるなど相違点が見られること⁽³⁹⁾も考慮し、歴史的観点およびこれら立像の表現や造作、技法などの特徴的観点か

ら制作年代を推測すれば、平安時代の初期から中期頃に制作されたと考えられることができるだろう。

7. 修復前の状態（劣化および損傷等）

一木造のため大変堅牢で、腕は、両腕とも亡失している（修理前写真）ものの、構造上の問題はない。頭部左上が八分の一程度、欠失しており、鼻柱は力強く残っているが、目はほんやりと輪郭を残すのみで、口は痕跡を確認できる程度である（図1）。

全体的に欠損部特に磨滅している部分が多い（図2）。経年劣化により干割れ（図3）、木材の痩せ、虫による汚損（図4）、虫害孔が全面にみ



図1



図2



図3



図4

られる。また、干割れ部分にシリコンを塗布した後、アクリル樹脂による着色を施した前修復（図5）が、首から腹部、および腹部から足（膝まで）にかけて見られ、著しく外観を阻害している。

足首より下および台座の部分が亡失しており、どのような造形であったのか定かではない。台座は、後年に、像が独立して立つことができるように取り付けられた後補の台座であると考えられる。

8. 修復方針

正面中央に施された前修復が、著しく外観を阻害しており、美観も損ねていることから、前修復で塗布されたシリコンおよびアクリル樹脂による着色を除去することを第一とした。また、経年による味わいを重視し、欠損部への補作は行わず、表面の磨滅はあるものの、木胎部は脆弱しておらずしっかりしており、構造上の問題がないため、一木造りの風合いを残すために、パラロイドを用いる含侵強化や、虫害孔へのマイクロバルーンなどを用いた充填は実施しないこととした。そのため、洗浄のみに留めた。



図5

9. 修復工程

- ①事前調査：目視観察（図6）、基礎調査、写真撮影
- ②台座より外す
- ③後世に施された補作部分および充填剤（シリコン）の除去（図7、図8）
- ④後世に施された補色部分の除去（図9、図10）
- ⑤洗浄：エタノール、精製水を用いた洗浄（図11）
- ⑥樹種同定のための科学分析
- ⑦台座に再設置

10. 材質

基材は、目視観察によって年輪の様子から広葉樹が用いられていることが確認できた。先行研究では、目視観察によって素材がケヤキの可能性があると指摘されてきたが⁽⁴⁰⁾、科学的立証に基づいた根拠がないため、今回、修復に伴い試料を採取することができ、樹種同定実験を行った。



図6



図 7



図 8



図 9



図 10



図 11

光学顕微鏡を用いて、横断面（図12）、まさ目面（図13）および板目面（図14）を観察した。その結果、年輪の始めに大径の道管がふつう一列に並び（孔圏部）、それ以外の部分（孔圏外部）の小道管は集団となって斜線状もしくは接線状の配列を示すこと（図12）、放射系組織に結晶細胞が認められ（図13および図14の矢頭）、さらに孔圏外の小道管は単せん孔およびせん肥厚を有す

るものが存在していた（図13）。これらの特徴は、これまでに報告されているケヤキの特徴⁽⁴¹⁾と一致しており、基材は、環孔材のケヤキと同定した。

ケヤキは、彫刻用の材の中で最も固い木材である。固いため彫刻が難しく、特に青けやきなどの彫刻に向かない固い木はツキ（槻）と呼ばれ、比較的彫刻に向く柔らかい赤味をおびたケヤキ（本櫟）と区別しながら取り扱われている⁽⁴²⁾。本文文化財の基材の場合は、経年劣化によって木材組織が柔らかくなっているという面もあるが、全体の色合いや、劣化をしていない芯部の様子などから、後者であると思われる。また、仏像の基材として広葉樹が使用されている事例は、東北地方に圧倒的に多く、近畿地方では事例自体が極めて少ないことが指摘されている⁽⁴³⁾。これら先行研究の結果を踏まえると、本文文化財は、東北地方もしくはその近辺で制作された仏像である可能性が高いといえる。

仏像の基材における散孔材と環孔材の利用に関

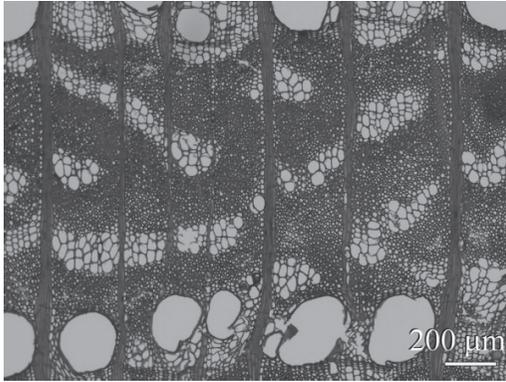


図12 横断面

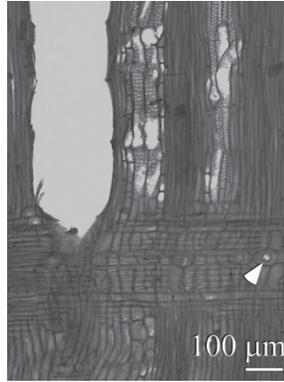


図13 まさ目面



図14 板目面

しても、岩手県と山形県では散孔材が環孔材より多く使われている事が多く、それに対して福島県では、散孔材より環孔材が多用されている事例が多いことがわかっていて⁽⁴⁴⁾。また関東では、広葉樹の利用割合が東北地方より少なくなっているものの、福島に隣接する栃木、そして栃木の大寺院である四本龍寺（日光山輪王寺）と同じ天台寺院の流れを汲む寺院の多い埼玉では、広葉樹のうち、散孔材が多く使われていることがわかっており、環孔材が使われている本事例は特異な例である。

関東にある都幾山慈光寺の仏像に、環孔材が使われているという事実は、これらの統計学的データを補完する意味でも意義深く、先行研究の推測を裏付ける結果を得ることができた⁽⁴⁵⁾。また、地方で仏像を制作していた可能性も指摘できることから、注目に値する。

11. まとめ

再修復処置に関しては、正面中央に施された前修復が著しく外観を阻害し、美観を損ねる原因であったが、前修復で塗布されたシリコンおよびアクリル樹脂による着色を除去することで、自然な風合いの外観へと戻すことができた。また、経年変化による古びの味わいを重視し、欠損部への補作をあえて行わなかったが、一木造の持つ強さやオリジナルの彫刻の表現を楽しむことができる外観を形成することができた。木胎部に致命的な脆

弱がみられないことから構造上の問題もなく、表面の磨滅も一木造りの風合いを残しながら、古びとして楽しめる木材の質感を残すことができた。従来の一般的な手法であるパラロイドを用いる含浸強化や、虫害孔へのマイクロバルーンなどを用いた充填を実施せず、洗浄のみに留め、文化財のオリジナル部分に負担のかからない修復処置を行うことができた。

一木彫像の成立においては、『栢木』の存在が当該分野で注目されており、ケヤキを用いた事例は、会津にある勝常寺の薬師三尊を含め数軀しか確認されておらず、本研究によって、また新たに平安時代の一木彫像の材質データとして、「カヤの少ない地域や、自生しない地域などでは、栢木についての別の解釈が生まれる可能性を示す」とする先行研究⁽⁴⁶⁾を補完するデータを得ることができた。

謝辞

本研究に当たりまして、ご協力をいただきました都幾山慈光寺佐伯頼榮御住職様、宇都宮大学農学部森林科学科木材材料学研究室、宇都宮大学農学部森林科学科森林生態学育林学研究室、大久保達弘教授に深謝いたします。



修復前



修復後

〈注〉

- (1) 埼玉県比企郡都幾川村教育委員会, 都幾川村文化財調査報告書第1集, 慈光寺遺跡群現況調査報告書, 第一法規出版株式会社, 1993
- (2) 埼玉県比企郡都幾川村教育委員会, 都幾川村文化財調査報告書第1集, 慈光寺遺跡群現況調査報告書, 第一法規出版株式会社, pp.5-8, 1993
- (3) 都幾川村教育委員会, であいふれあい文化財, 『ふるさと都幾川ガイドブック』, p.4
- (4) 原島礼二, 慈光寺創建, 金井塚良一編, 『慈光寺』, pp.60-63, 1986
- (5) 川尻祐治, 「慈光寺」久野健監修『関東古寺の仏像』, 芸艸社, pp.139-141, 1976
- (6) 大矢那宣, 平安前期の木彫仏陸奥の仏の誕生, 別冊太陽, 『みちのくの仏像 東北のカミとなった仏たち』, 平凡社, pp.25, 2012
- (7) 清水真澄, 東国の仏像と仏画, 太陽仏像仏画シリーズ III, 『平泉鎌倉「東日本」』, 平凡社, pp.82, 1978
- (8) 大矢那宣, 平安前期の木彫仏陸奥の仏の誕生, 別冊太陽, 『みちのくの仏像 東北のカミとなった仏たち』, 平凡社, pp.25, 2012
- (9) 『会津旧事雑考』
- (10) 虎関師鍊撰, 『元亨釈書』
- (11) 望月信成, 佐和隆研, 梅原猛, 武神と福神 - 諸天, 『定本 仏像 心とかたち』, 日本放送出版協会, pp.165-183, 1971
- (12) 望月信成, 佐和隆研, 梅原猛, 武神と福神 - 諸天, 『定本 仏像 心とかたち』, 日本放送出版協会, pp.165-183, 1971
- (13) 望月信成, 佐和隆研, 梅原猛, 武神と福神 - 諸天, 『定本 仏像 心とかたち』, 日本放送出版協会, pp.170-171, 1971
- (14) 清水真澄, 東国の仏像と仏画, 太陽仏像仏画シリーズ III, 『平泉鎌倉「東日本」』, 平凡社, pp.81-100, 1978
- (15) 東京国立博物館, 京都国立博物館, 比叡山延暦寺, 天台の美術, 『比叡山と天台の美術 比叡山 開創一〇〇年記念』, 朝日新聞, pp.22-31, 1986
- (16) 副島弘道, 第3章 古代 III, 平安時代前期, 『日本仏像史』, pp.59, 2001
- (17) 毛利久, 平安時代の壇像について, 『日本仏教彫刻史の研究』, 宝蔵館, pp.134-145, 1970,
- (18) 久野健, 第三章 平安初期木彫の誕生, 『日本仏像彫刻史の研究』, 吉川弘文社, pp.308-319, 1984
- (19) 久野健, 第三章 平安初期木彫の誕生, 『日本仏像彫刻史の研究』, 吉川弘文社, pp.308-319, 1984
- (20) 久野健, 第三章 平安初期木彫の誕生, 『日本仏像彫刻史の研究』, 吉川弘文社, pp.308-319, 1984
- (21) 久野健, 一勝常寺薬師三尊像, 第一章 東北地方の平安初期彫刻, 『東北古代彫刻史の研究』, 中央公論美術出版, pp.9-10, 1971 および同久野健, 二勝常寺の木彫群, 第一章 東北地方の平安初期彫刻, 『東北古代彫刻史の研究』, 中央公論美術出版, pp.19-20, 1971
- (22) 久野健, 黒石寺薬師如来像, 『日本仏像彫刻史の研究』, 吉川弘文館, pp.348-359, 1984
- (23) 久野健, 三成島毘沙門堂の伝阿弥陀, 第一章 東北地方の平安初期彫刻, 『東北古代彫刻史の研究』, 中央公論美術出版, pp.30-39, 1971
- (24) 佐藤昭夫, 仏像, 太陽仏像仏画シリーズ III, 『平泉鎌倉「東日本」』, 平凡社, pp.121-127, 1978
- (25) 本間紀男, 一木彫の動向, 『木彫仏の実像と変遷』, pp.111, 2013
- (26) 佐藤昭夫, 仏像, 太陽仏像仏画シリーズ III, 『平泉鎌倉「東日本」』, 平凡社, pp.121-127, 1978 および, 千葉大学工学部小原次郎氏の顕微鏡観察による素材同定結果に基づく。久野健, 第一章 東北地方の平安初期彫刻, 『東北古代彫刻史の研究』, 中央公論美術出版, pp.10, 1971
- (27) 小原二郎, 関東地方における木彫の用材について, 久野健編, 『関東彫刻の研究』 pp.130, 学生社, 1964, および, 佐藤昭夫, 仏像, 太陽仏像仏画シリーズ III, 『平泉鎌倉「東日本」』, 平凡社, pp.121-127, 1978
- (28) 小原二郎, 関東地方における木彫の用材について, 久野健編, 『関東彫刻の研究』, 学生社, pp.124-131, 1964
- (29) 小原二郎, 関東地方における木彫の用材について, 久野健編, 『関東彫刻の研究』, 学生社, pp.124-131, 1964
- (30) 本間紀男, 一 一木素木像の底流, 第三章, 木彫仏の構造と用材, 『木彫仏の実像と変遷』, 大河書房, pp.101-122, 2013
- (31) 毛利久, 平安時代の壇像について, 『日本仏教彫刻史の研究』, 宝蔵館, pp.134-145, 1970
- (32) 小原二郎, 関東地方における木彫の用材について, 久野健編, 『関東彫刻の研究』, 学生社, pp.120-131, 1964
- (33) 佐藤昭夫, 仏像, 太陽仏像仏画シリーズ III, 『平泉鎌倉「東日本」』, 平凡社, pp.121-127, 1978
- (34) 小原二郎, 関東地方における木彫の用材について, 久野健編『関東彫刻の研究』学生社, pp.123, 1964
- (35) 若林繁, 大蔵寺の一木彫群, 別冊太陽, 『みちのくの仏像 東北のカミとなった仏たち』, 平凡社, pp.58, 2012
- (36) 若林繁, 大蔵寺の一木彫群, 別冊太陽, 『みちのくの仏像 東北のカミとなった仏たち』, 平凡社, pp.58, 2012
- (37) 井上正, 序 怨霊世界の造形について - 神護寺薬師如来立像と神応寺伝行教律師坐像, 『古佛[続]子密教彫像巡歴』, pp.ii-xxiii, 2012
- (38) 宝城山大蔵寺の縁起によれば, この寺院は坂上田村麻呂の草創であり, 信夫郡に霊木を得て仏工に彫刻させ, 霊木の下に殿堂を建立し, 尊像を安置したとされる。
- (39) 久野健, 一立花毘沙門堂二天像と高蔵寺阿弥陀如来像, 第5章中尊寺時代の東北彫刻, 『東北古代彫刻史の研究』, 中央公論美術出版, pp.70-71, 1971 および, 同二藤原時代末期の東北彫刻, 第5章中尊寺時代の東北彫刻, 『東北古代彫刻史の研究』, 中央公論美術出版, pp.72-75, 1971
- (40) 林宏一, 慈光寺の寺宝, 金井塚良一編, 『慈光寺』 pp.2
- (41) 伊東隆夫, 木材研究資料, 『日本産広葉樹材の解剖学的記載 I』, pp.81-181, 1995

- (42) 本間紀男, 一 一木素木像の底流, 第三章, 木彫仏の構造と用材, 『木彫仏の実像と変遷』, 大河書房, pp.111-122, 2013
- (43) 本間紀男, 環孔材の源流, 木彫仏の構造と用材, 『木彫仏の実像と変遷』, 大河書房, pp.131-132, 2013
- (44) 本間紀男, 環孔材の源流, 木彫仏の構造と用材, 『木彫仏の実像と変遷』, 大河書房, pp.131-132, 2013
- (45) 本間紀男, 一 一木素木像の底流, 第三章, 木彫仏の構造と用材, 『木彫仏の実像と変遷』, 大河書房, pp.111-122, 2013
- (46) 金子啓明, 第5章日本の木彫像の樹種と用材観, 伊藤隆夫編『木の文化と科学』, 海青社, pp.100-101, 2008